

## 幼保小接続の推進について

### 1 第1回総合教育会議の振り返り

第1回目の総合教育会議においては、静岡市の幼保小接続の取組について現状を把握していただくとともに、教育・保育内容の工夫の必要性や支援を必要とするこどもに対する取組の大切さについて、市長および教育委員の認識を共有した。

その上で、課題や現在実施している取組等についてご意見をいただいた。

- ①就学前施設の環境と小学校の環境の違いに対する取組を、それぞれに行っているが、相互理解が十分ではない。幼児期のこどもの体験や育まれた力を小学校で生かすための環境が十分に整備されていない。
- ②発達課題を抱えたこどもが支援を受けずに入学したことにより、入学後のこどもたちが、就学前施設の生活と小学校での生活のギャップに適応できず、様々な問題行動が顕在化している。また、小学校入学当初、こどもが、小学校での学習や生活に関する戸惑いや悩みを抱え込み小学校の学習や生活に支障をきたしている。それらのこどもに対する幼保小の接続がスムーズに行われていない。

«第1回総合教育会議での意見を課題・分野ごとに整理（主な論点・発言から）»

#### (1) 教育・保育内容の接続について

- ・こどもに対してどのような指導をしていくかが大切。教育施設はこどもをどのように繋げて育てていくのかを具現化するためのもだと感じる。
- ・教師が黒板の前に立ち、皆同じ方向を向いて先生に向かって学習しているという仕組み自体が今の時代に合っていない。
- ・就学前施設でお試し授業を行ったり、学校に行って困らないようにこどもを教育したりし兼ねないが、それは根本的に違う。
- ・こどもの想いを繋ぐ、こどもが伸び伸び生活し、自分であることを大事にしてもらえる感覚だったり、自己肯定感を育んだりしていけるような教育をしてほしい。
- ・静岡市だけでなく、日本全体で学校の学びを変革していくタイミングにきている。
- ・「架け橋期カリキュラム」を就学前施設と小学校が一緒に作っていく段階にきている。

#### (2) 個の情報・支援の接続について

- ・現状として、必要な情報が届いていないという課題がある。福祉から学校へ就学前施設から学校へ、就学前施設から福祉へなど、行政の縦割りを越えた体制が必要ではないか。
- ・就学前施設には、こどもと保護者を地域につなげる役割もある。地域とどのように連携するかという視点も必要ではないか。

## 2 あるべき姿（理念）

5歳児（年長）から1年生の2年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるための重要な時期とされ「架け橋期」と呼ばれている。こども一人一人が安心して学び続けられるよう、幼保小の接続を推進することが必要である。

### 【あるべき姿】

こども一人一人が、幼児期や遊びや生活の中で育まれた力を発揮し、小学校で生き生きと学ぶ姿

### 【現状】

就学前施設から小学校へ教育環境が移行する段差があり、小学校での学習や生活に支障をきたす子どもがいる。

## 3 課題

- 課題① 就学前施設は「5歳児後半のカリキュラム」、小学校は「1年生入学当初のカリキュラム」の作成をそれぞれ行っているが、接続を見通した教育（保育）課程の編成・実施は行われていない。就学前施設の保育者と小学校教員が共通認識をもち、接続を推進する体制がないため、幼児期の子どもの体験や育まれた力を小学校で生かすための環境が十分に整備されていない。
- 課題② 発達課題を抱え支援を受けずに入学したことにより、就学前施設の生活と小学校での生活のギャップに適応できず、様々な問題行動が顕在化している。また、小学校入学当初、小学校での学習や生活に関する戸惑いや悩みを抱え込み、学習や生活に支障をきたす子どもがいる。

## 4 課題を解決し、あるべき姿の実現にむけた今後の取組方策

### （1）課題①

- ① 既存の取組 現状と改善方法 ※スケジュールは別紙1のとおり

ア 学校に向けた公開保育・就学前施設に向けた公開授業

現状	改善方法
<p>就学前施設は就学先全ての小学校に案内を出しているため、多い学校では10園以上の公開保育に参加している。</p> <p>小学校は就学が予想される就学前施設へ案内を出しており、多い園では10校以上の公開授業に参加している。</p> <p>相互の職員の負担のみが大きく、効果的な環境等の共有ができていない。</p>	<p>中学校区ごとの幼保小グループを編成（小中一貫教育により、中学校区で教育目標が統一されているため、幼保小接続も中学校区内の就学前施設と小学校でグループを編成する）</p> <p>中学校区（複数校の場合は小学校区に分けることも可能）を基本とした接続の体制により、公開の回数や内容など実施方法を検討する。</p> <p>R 8 実施方法検討 R 9 就学前施設研修実施 新実施方法での公開保育・公開授業の実施</p>

## イ 子どもの育ちと学びをつなぐ研修会

現状	改善方法
学校側の参加者が少ない。人数の偏りがあり就学前施設・小学校の中学校区ごとのグループ協議が実施できない。 R 5 学校：13名 就学前施設：141名 R 6 学校：17名 就学前施設：158名 R 7 令和8年1月実施予定	就学前施設と小学校から各1名ずつの参加を目指す。 実施後、各中学校区の状況に応じた参加者数を調整する見込み。 R 8 全市立小学校の参加 R 9 幼児の在籍する全就学前施設の参加 (施設の体制により参加が不可能な場合は中学校区内で共有を行うことも可)

## ウ 幼小接続会議

現状	改善方法
年1回実施。公開保育と公開授業の分析をもとに、幼小接続の進み具合について現状を確認するのみとなっている。	年2回実施する。 R 8 1回目 方向性の検討 各組織への共有事項確認 2回目 次年度への検討、改善策の決定 今後、中学校区ごとの接続の進捗により、必要に応じて会議の追加開催の要否を検討する。

## ② 新たな取組

## ア 幼児や児童の特性や発達の段階を踏まえ、教育の内容や方法を工夫するための「架け橋期カリキュラム」作成

内容
<p>・幼保小接続を円滑に進めていくためには、こどもに関わる大人が接続の意義について理解することが重要である。「架け橋期カリキュラム」をこれから作成する各中学校区の就学前施設と小学校が、共通の認識で進めていくように「(仮)幼保小接続ガイドライン」を作成する。(令和8年3月に完成予定)それを基に「架け橋期カリキュラム」を作成する。</p> <p>「(仮) 幼保小接続ガイドライン」概要（案）※イメージ等は別紙2のとおり</p> <p>(1) 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の意義～育ちと学びをつなぐ～  (2) 幼児期の学び「学びの芽生え」  (3) 児童期の学び「自覚的な学び」  (4) 生涯の学びの基盤をつなぐ「架け橋期カリキュラム」作成に向けて  (5) 円滑な接続の手掛かり「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」  (6) 幼児教育と小学校教育接続・推進の手順  (7) 安心して入学を迎えるために</p>

- ・こどもたちの発達や学びの連続性を保障するための、「架け橋期カリキュラム」作成に向けた取組

- R 8 (1) ガイドライン配布・周知  
 (2) 接続を見通した5歳児部分のカリキュラムの作成  
 (3) 中学校区で「架け橋期カリキュラム」の作成  
 R 9 (4) 「架け橋期カリキュラム」実施と改善

【新たな取組に関わる用語】

「(仮) 幼保小接続ガイドライン」

こどもに関わる大人が幼児教育と小学校教育の接続の意義を理解し、架け橋期の教育の充実を推進していくための静岡市の方向性を示したもの

「カリキュラム」

教育目標を達成するために、教育内容や学習活動を計画的に編成し順序立てて示したもの

「架け橋期カリキュラム」

各中学校区内の就学前施設と小学校で作成する架け橋期のカリキュラム

(2) 課題②

① 既存の取組 現状と改善方法

ア 就学前施設に対する気になるこどもへの保育支援事業

現状	改善方法
障害認定を受けていないが発達上の課題があり、特別な支援を必要とするこどもに対して、その子の特性に合わせた就学前施設での支援や関わりが十分でない。	R 6 から開始した特別教育支援ソフト（個別最適な支援計画を作成・実施するためのソフト）を活用した施設への助成の実証実施において、こどもに対する影響や小学校への引継ぎ等の効果検証を行う。 R 7 効果検証実施 R 8 効果検証継続

イ 1歳6か月健診で発達が気になるこどもに対する早期支援事業

現状	改善方法
保護者に対して、こどもの特性を伝え、支援の方向性を共有するための時間を十分に確保できず、支援先である児童発達支援事業所等につながらないことがある。また、つなぎを希望しても、事業所の選択や手続きに時間を要するため、その間の支援が中断してしまう。	保護者がこどもの発達特性について、十分な理解が得られるよう、また、発達段階に応じた適切な支援に導けるよう児童発達支援事業所等につなぐ力を強化した。 R 7 個別相談と継続参加できる教室を追加

② 新たな取組

ア 特別な支援を必要とすることの支援を継続する取組

内容
5歳児健診について、公私立園の5歳児（年中クラス児）を対象に、健診チームが巡回する方式で実施する。
R7 (1) 実証実施
R8 (2) 本実施を目指す

5 協議の視点

幼保小接続の推進について、あるべき姿を実現するために、提示の取組を進めることでよいか。